大斎節第3主日　　2011/3/27

聖ヨハネによる福音書第4章5～26節、39～42節
於：聖パウロ教会　司祭　山口千寿

皆さんは、サン・テグジュベリの『星の王子さま』という有名な物語をご存じだと思います。愛読書の一つにしている方もおられるかも知れません。その中に、小さな惑星からやってきた星の王子さまとサハラ砂漠に不時着した飛行士のぼくが、砂山の上に腰を下ろして会話をする場面があります。砂漠で水を求めて井戸を探して歩いていくうちに、くたびれてしまったからです。砂漠では何も見えません。何も聞こえません。だけれども何かが、ひっそりと光っているのです。

「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を、ひとつ隠しているからだね」と王子さまが言います。ぼくは砂漠が不思議に光るわけを、その言葉で、突然、理解するのです。そして、自分が子どもの頃、住んでいた家のことを思い出します。その家は古い家で、何か宝物が埋められているという言い伝えがありました。誰もその宝を発見したこともなければ、探そうとした人もいませんでした。でも、その宝が、家全体に不思議な魔法をかけていました。ぼくの家は、その見えない中心部の奥に秘密を一つ隠していたのです。ぼくは王子さまに言いました。「そうだね、家や、星や、砂漠を美しくしているものは、目に見えないね！」 夜の明ける頃、二人は井戸を発見することができました。その水は、まるで祝祭の喜びのように、心にしみる水だった。贈り物にも似た、心にいい水なのだ。

ぼくの心に子どものころのクリスマスがよみがえってきます。ツリーを飾るたくさのロウソクの光、真夜中のミサの音楽、みんなの笑顔、それらすべてが、ぼくの受け取る贈り物を光り輝かせていたではないか。こんな風に物語が展開して行きます。

さて、今日の福音書は、ヤコブの井戸の傍らで、イエスさまとサマリアの女が対話をする場面です。サマリアの女がイエスさまとの対話を通して、生きた水、永遠の命に至る水を与えられ、渇きを癒される物語です。

ヤコブの井戸というのは、イスラエルの族長のアブラハム・イサク・ヤコブの3人の内の三代目の祖先のヤコブが掘って、その子孫に水を与えたと言い伝えられる井戸です。30メートルも深さのある井戸ですが、砂漠の中で水を得ることは容易なことではありませんから、この井戸が与えられたことは、その後、イスラエルの人々が

何代にもわたって生きていくことを保証することになりました。人々は、その井戸を「ヤコブの井戸」と特別の思いを持って呼んだのでしょう。

イエスさまと弟子たちは旅をして、その井戸にたどり着きます。ユダヤ人は、南のユダヤと北のガリラヤの間を行き来するときは、通常、その間にあるサマリア地方を避け、迂回するコースをとるのが普通の行き方でした。何故、迂回しなければならなかったのか。その理由は、「ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである」と記されています。

紀元前722年に北イスラエル王国は、アッシリアによって滅ぼされました。そしてイスラエルの指導者たち、各界の有力者たちは、アッシリアに捕囚として連れて行かれました。首都であったサマリアには、異国の五つの町から異民族の人々が入植してきて、それらの人々と残されたサマリアの民との間に混血が起こりました。そのため、ユダヤ人は、サマリア人を民族としての血の純粋性が失われたとして蔑むようになりました。宗教的にも異教の神々が持ち込まれて、ユダヤ人はエルサレムの神殿にサマリア人を受け入れなくなりました。そのために、サマリアの人々はこれに対抗して、シカルの町の直ぐ側にあるゲリジム山に独自の神殿を建設し、そこで礼拝をしたのです。聖書も、モーセの5書、創世記から申命記までを独自に編纂して、モーセ5書だけを正典として用いることとなり、宗教的にも対立が深まって行きました。

その後、南ユダ王国も新バビロニア帝国に滅ぼされ、バビロンに捕囚となりました。それが、約50年後に、ペルシャによって解放されます。エルサレムに帰ってきたユダヤ人が、破壊されたエルサレムの城壁を修復し再建しようとしたとき、その工事の妨害を終始、企てたのはサマリア人でした。

時代は下って紀元前2世紀になると、マカベア戦争と呼ばれるセレウコス朝シリアとユダヤとの間に戦争がありました。パレスチナのヘレニズム化を進めるシリアが、ユダヤの伝統的な宗教を激しく迫害したためです。サマリアはシリアと一緒になってエルサレムを攻撃し、それに対してユダヤ人はゲリジム山の神殿を焼き討ちにする事件も起こりました。そのような歴史的経過から、ユダヤ人とサマリア人との間は、大変険悪な関係になっていました。そのため、ユダヤ人はサマリアを通ることを避けたのです。

それが、イエスさまと弟子たちは、この時はサマリアを通過する道を敢えて選んで、ガリラヤに向かったのです。イエスさまが、洗礼者ヨハネよりも多くの弟子を作って洗礼を授けていると、ファリサイ派の耳に入りました。そのことを知って、急遽、ファリサイ派の追及を避けて、ガリラヤに急ぐ必要があったためでしょうか。福音書

は、「サマリアを通らねばならなかった」（4節）と書いて、それもまた神さまのご計画であったことを暗示しています。

イエスさまの一行は、何時間、歩き続けたのでしょうか。歩き疲れて、正午頃、ヤコブの井戸にたどり着きます。たまたまそこに、一人のサマリアの女が水くみにやって来ます。ヤコブの井戸は、シカルの町から1.5キロほど離れたところにありました。日中、日差しの強い頃には、誰も水くみになど来なかったのです。水をくむ仕事は、朝か夕方の涼しい時間に行うことが習慣でした。それを人目を忍ぶようにして、暑い盛りにやって来るのは、ワケありだと言わなければなりません。その女に、イエスさまは、「水を飲ませてください」と頼むのです。その一言から、全てが始まりました。

声を掛けられた女も驚きます。誰にも会わずに、一人、さっさと仕事をして引き上げる積もりのところ、交際をしないはずのユダヤ人の、しかも男性から話しかけられるとは思っても見ないことだったでしょう。しかも話をしているその相手は、決して渇くことのない水を与えることができると言うのです。その水さえ手に入れれば、もう暑い最中、遠くの井戸までやってこなくてもすむようになる。実際の生活面でも、また人に隠れるように、こそこそと行動しなくても良くなるという、気持ちの上でも、解放されることを期待して、「その水をください」と、この女は願うのです。

その願いに対して、イエスさまは、この女が最も触れられたくない部分、急所に単刀直入に切り込んでいきます。回りくどい言い方などせずに、この女が、今、しなければならないことを、預言者のような鋭い洞察力をもって指摘するのです。避けては通れないことを直視するよう促すのです。

それは、この女の魂の渇きです。渇きをどのようにしたら癒すことができるのかという問題です。5人の夫との生活を通しても、満たされなかった何かが、ずっと残っているのです。或いは、男たちはこの女の求めにつけ込んで、弄んだのかも知れません。

この「5人の夫」を象徴的に解釈して、これはモーセ5書を指すのだと理解した人がありました。或いはまた、異国からサマリアに持ち込まれた偶像のことではないかという解釈もありました。律法によっても異国の神々によっても癒されない渇きがあるのです。そして今もなお、別の男との生活の中で追い求めている何かがあるのです。その何かが与えられる。それは何処においてでしょうか。

サマリアの女がイエスさまを預言者、神さまの御言葉を語り伝える人と認めたことから、2人の対話は、まことの礼拝の問題へと展開していきます。エルサレムでもなく、ゲリジム山でもなく、まことの神さまを知ったものたちが、その神さまを礼拝す

るために集められたところで、霊と真理をもって礼拝を捧げるときが、今、来ているとイエスさまは教えておられます。

霊と真理をもってする礼拝、それはどのような礼拝なのでしょうか。わたしたちが、まごころから捧げる礼拝が、霊と真理をもってする礼拝なのでしょうか。全身全霊をもってすれば、父なる神さまが求めておられる礼拝になるのでしょうか。夜を徹して熱い祈りを捧げれば良いのでしょうか。そうではないと思います。人間の中に根拠をおいた礼拝は、それがどれほど熱意に溢れたものであったとしても、嘘偽りのないまことの気持ちから出たものであったとしても、それが神さまの求め給う礼拝になるわけではありません。

そうではなくて、聖霊の導きのもとに、神さまの真実に基づいて捧げられる礼拝が、霊と真理をもって行われる礼拝です。そこでは、エルサレムかゲリジム山かという対立と抗争、敵意と憎悪が乗り越えられて、礼拝が捧げられるのです。

先程、ユダヤ人はサマリア人と交際しなかったと書かれていると言いましたが、「交際しない」という言葉は、もともと、水瓶を共にしなかったと言う意味であったと言われています。同じ水瓶から水を飲まない、だからそれぞれの場所で異なった礼拝をしていたのです。霊と真理をもってする礼拝は、そのような対立を乗り越えて、同じ水瓶から水を飲むことができるような礼拝です。

そのような礼拝は何処で捧げることができるのでしょうか。それは、イエスさまの十字架が、その場の真ん中にドーンと立てられているところです。そこで十字架の御言葉が語られるのを聞くのです。そこで十字架の上で裂かれたイエスさまの体と流された血が与えられ、それにみんなが一緒にあずかるのです。それが霊と真理をもって捧げられる礼拝です。そのためにわたしたちは招かれているのです。その礼拝が行われるときに、神さまのわたしたちに対する愛が輝き渡るのです。溢れ出るのです。そこに触れるときに、わたしたちの渇きも癒される。癒されるばかりではありません。癒されるだけでは、その水は溜まり水となって腐ってしまいます。そうではなくて、わたしたちに命を与える水は、わたしたちの中に泉となって溢れ出て、周りを潤して行くのです。

サマリアの女は、イエスさまとの対話を通して、自分の中に変化が起こったことを悟るのです。それで水瓶をそこに置いたまま、それまでは顔を合わせるのも嫌だった人々のところに行って、イエスさまのことを語り伝えました。それを聞いたサマリアの人々は、イエスさまに、「自分たちのところにとどまるようにと頼んだ」とあります。イエスさまから親しく聞いて分かることを望んだのです。イエスさまと繋がることを願ったのです。イエスさまとのあいだに命の行き来が起こることを望んだのです。そしてその結果、イエスさまが、本当に世の救い主であることを知ったのです。

わたしたちも聖書の御言葉に耳を傾け、サクラメントを通してイエスさまを自らのうちにお迎えし、イエスさまと共にとどまる生活を送ることによって、渇くことのない命の水を隣人と分かち合うことができるようになるのではないでしょうか。

星の王子さまは言いました。「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を一つ隠しているからだね。」普段は隠されている井戸がある。その井戸を探し当て、そこからほとばしる水に潤されるなら、わたしたちの世界もまた、今までとは違った輝きをもって見えてくるのではないでしょうか。

イザヤは預言して言いました、「あなたがたは喜びをもって、救いの井戸から水をくむ」(12:3)と。わたしたちも生ける水によって渇きを癒していただいて、生き生きとした毎日を過ごして参りたいと思います。